

# ロシア平原の大河 - ボルガ川 -

前企画調査部 副参事 渡辺 正順

## 1 はじめに

平成10年9月にロシア平原を流れるボルガ川を訪れる機会を得て、河口から途中モスクワ運河を通してモスクワまでの間約3,000kmを沿川の街に立ち寄りながら二週間かけて大型船で遡った。ボルガ川は、流路延長約3,700km、流域面積は約138万km<sup>2</sup>で、ロシアの河川の中では五番目の大きさである。水源はモスクワの北西にある海拔225mの小山で、河口は海拔-30mのカスピ海となる。流れが緩やかであるため、古くから水上交通が盛んで沿川には16世紀頃から都市が発達している。1930年代から融雪洪水の調節も兼ねた水力発電ダムが築造されはじめ、現在9つのダムがある。これらにより形成されるダム湖は階段のように連なり、その延長はボルガ川の総延長の7割にあたる。各ダム間は閘門で往来でき、大型船の航行も可能となっている。

## 2 ボルガ川河口

大河ボルガの河口の街アストラハンは、カザフスタンに国境を接するカスピ海沿岸の大港湾都市である。街の中心部は河口から100km程のところにあるが、ここから下流の河口部には1万km<sup>2</sup>以上の広大なデルタ地帯が広がっている。ここはペリカンをはじめとする世界有数の渡り鳥の中継地となっている他、キツネやアザラシなどの野生生物が生息しており、自然保護区に指定されている。また、このあたりは漁業も盛んで、中でもキャビアが美味しいチョウザメ漁が有名である。しかし、近年築造されたダムの影響による水質汚染で漁獲量は激減しているようである。実際、上流のダム湖ではアオコの発生も見ら



写真 - 1 ボルガデルタの湿地帯。

れ、水の色は緑であったり褐色であったり全般に水はきれいとは言いがたかった。

## 3 ボルガ川と沿川の街

ボルガ川沿川には、ロシアの人口100万人以上の都市のほとんどが集中している。今回寄港した沿川の街には、第二次大戦の激戦地で有名なボルゴグラード(旧スターリングラード)やロシア第三の都市ニージニーノブゴロド等がある。沿川にはロシア屈指の工業都市が多く、物資輸送を重要な水上交通路であるボルガ川に頼ってきたが、近年は時間的な面からそのほとんどが鉄道輸送に切り替わりつつあるようである。ダムができてからのボルガ川の結氷期間は4~5ヶ月と長く、北米の五大湖のような砕氷船もないため、この間運河は機能しないこともその一因となっている。それでも今なお、ボルガ川は交通の大動脈として重要な役割を担っているようで、大小様々な船が頻繁に往来していた。



写真 - 2 朝陽のあたるボルゴグラードの港と街。早朝にもかかわらずたくさんの船が行き来していた。

ダム湖の階段が始まるのは、ボルゴグラードの上流からである。モスクワまでのダムにある閘門はほとんど形式が同じで、下流側がマイターゲートで、上流側は昇降式のゲートであった。ボルゴグラードのダムをのぼると景色が一変し、遙か遠くに見える対岸までの距離は広いところで50kmもある。ここから連続するダム湖の中で最大のものは、ニージニーノブゴロドのあるチェボクサルイ湖であり、湖水面積は、約6,500km<sup>2</sup>と琵琶湖の10倍に近い。

沿川の大きな街はどこも整然としていて、道路沿いの美しい並木や緑も多さが印象的であった。街の中心部に



写真 - 3 ボルゴグラードダムを昇る閘門。ここは上下流ともマイターゲートであった。



写真 - 4 ウリヤノフスクの公園から望む下流から三番目のダム湖（クイビシエフ湖）。

は必ず公園がある。中には、手入れの行き届いた花壇とレーニンの像があり多くの市民で賑わっていた。

港の周辺と閘門の水路以外には護岸をほとんど見かけなかったが、護岸や岸壁等のコンクリート構造物の破損が目についた。あまり補修は行われていないようである。

#### 4 .モスクワ運河

モスクワ運河は、1937年に建設されたボルガ川とモスクワを結ぶ延長128kmの運河である。モスクワに近づくにつれ辺りはベットタウンの様相を呈してくる。運河の幅は広いところでも100m以下で、護岸形式はコンクリート矢板、捨て石、超大型のブロック等様々であったが、大型船が通ると大きな波が発生し河岸にまともにぶつかっていて、コンクリート矢板護岸のような直壁の箇所破損が随所に見受けられた。

#### 5 .モスクワ市内

市内を流れるモスクワ川では夏の間水上バスが運行されている。所々に親水階段があり小段や天端に散策路が整備されていたが、あまり利用されていないようであった。周辺も含めると人口が1,300万人とも言われるモスクワでは、市内の車の多さとは対照的に主要な道路ですら驚くほど信号がない。建築物ではスターリン時代のゴシック様式のものが目立ち、これらは夜になるとライトアップされ、静粛で幻想的な感じであった。



写真 - 5 モスクワ川の水バス発着場。遠くに見えるのはモスクワ大学。

#### 6 おわりに

平成10年9月といえば、ちょうどロシアの経済危機が盛んに報道されていた時期であったが、モスクワのような大都市を除くとそのようなことを感じることはなかった。ロシアのボルガ川流域などは、日本ではほとんど紹介されず、情報も少ない地域であるが、このようなところを行程のほとんどを船で、つまり川の上で過ごしたことは貴重な体験であった。河口から上流部まで一気に、ほぼ南北に3,000km以上も移動すると、その気候はもちろん、植生、民族、文化も上流と下流では大きく違うことを肌で感じる。

ロシア民謡に「母なるボルガよ 豊かに満ちあふれるはるか遠くに流れていく」というのがある。現在のダム湖が連なるボルガ川は本来の川の姿ではないが、船での旅を通じて、昔も今もロシアの人々のにとってこの川は、正に母なる川であることを体感した。